

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第2号 2007/3/17 発行



鳥忘食生態田の新春田植活動には、百名以上のボランティアが参加

お久しぶり、お米さん

何 貞青（新故郷文教基金会・研究員）

「ヤッホー、田植えに行こう！」畦に置かれた水稻の苗の鮮やかな緑、水田はきらきらと輝き、大地は春の耕作に加わるよう呼びかけている。

2007年3月7日、新故郷文教基金会が行った「鳥忘食生態米」の田植活動には、100人を超すボランティアが参加、たくさんの子供たちが田んぼの中で稲にまみえ、水田の泥と仲良しになって、貴重な農作業を体験できる行事となった。そしてこれらの生態米は収穫後たかとりペーパードーム台湾再生の建設基金に当てられる。



新故郷鳥忘食生態米の進物セット

挑米坑*で稲作の再興

「私たちがここを挑米坑というのは、かつて埔里と魚池間の米を担ぐ休息地点だったからだが、この20年来田植をやめ、稲作をやめていた。私たちは毎日お米を食べているのに、それがどのように育ち、実るのか忘れていたのだ。」この活動を始めるにあたって、新故郷文教基金会の廖嘉展董事長はその意義をこのように強調した。

2006年私たちは桃米で生態米試験栽培を行ったが、これは社区の中で大いに話題になった。地域の文化歴史を伝承し、桃米の子供たちに故里の深い根源である稲作文化を再認識させ、自然農法を推進し、健康な土地を後世に残すため、隣の地主の蒋永欽さんのご協力で、長く休耕していた田の0.4ヘクタールを整理できたので、この春社区住民を招いて一緒に生態米の種まきをしたいと考えたのである。

「今日、私たちは敬虔な気持ちで耕地に親しみ、具体的な行動を通して耕地と共に成長し、この田植えが一生涯忘れられない思い出になればと願う」と廖嘉展董事長は期待を膨らませる。

* 桃米はもともと米をかつぐ意味を持つ挑米と呼ばれていた。挑は中国語で「てんびん棒でかつぐ」という意味があり、ティアオというその発音も桃のタオと良く似ている。(訳注)

田植宣誓

今回植えた苗は、ほのかにサトイモの味わいを持った台農71号益全香米で、農作業を始めるにあたって、生態田に神の加護慈愛を願い、「田植宣誓」の厳かなる誓いを、農業委員会の特有生物研究センター彭国棟副主任の先導により、声をそろえて唱えた：

われらが愛しむ耕地に

われらは願う

敬う心を持ちて、大地と共にあり

われらは用いず 耕地を危めるものを

生態環境を毒する行いはせず

われらは共同の誓いにより

子々孫々に残したい

永遠の浄土

労働の汗水を持って

耕地に愛しみの情を！

宣誓が終わるや、百人を超す参加者は直ちに生態田に入り、田植えに着手した。

参加者が多く10組に分けた結果、「宇宙一無敵美女軍団」、「一級若者隊」、「無敵勇士隊」、「不器用組」...といったチームが現場に出現、にぎやかに入り乱れる様はまるで春耕フェスティバルだ。

「おい、間違ってるぞ、きっちり前に合わせろ!」、「なんてかわいい苗なの、踏みつけないでよ!」...子供たちは泥に脚を入れるやいなや夢中になり、傍のお父さん、お母さんはずっと言い聞かせたり、田植



「田植宣誓」の音頭をとる彭国棟副主任



桃源小学校蔡鳳琴校長(右)は、50人以上の生徒、教師、父兄と共に耕作体験



思い出づくりに、我子に真剣に田植えを教える父母たち

えする稲を渡したり、もうてんてこ舞いだった。

まもなく、みんなの衣装、頭や顔は泥にまみれた。多くの父母たちはカメラを持って自分たちの泥人形を追いかけ、間近で絶好のシャッターチャンスを狙った。

「田んぼの中に入るんだから汚れるのは当然ね、まるで彫刻だわ」台中から来た一人のお母さんは、全身泥まみれの子供を見て、にこにこしながら言った。「今では全部機械で田植えでしょ、子供を連れてきて、自分の手でやってみるなんて、これは一生の思い出になるわ！」

みんな農業は素人だから、植えた苗はそろわず、粗なところ密なところばらばらで、あちこちで歪んでいる。桃米の正真正銘のお百姓さん、蕭金生、李新丁おじさんたちの目からすると、若い輩はなんと下手くそなんだ！ただの物好きでできたものには、いっそ師範役をと、ズボンの裾を巻き上げ田んぼに入り、きびきびしたお手並みを見せれば、満場の賞賛を浴びた。

苗は自然の成長に委ねて

田植え作業もお昼ごろには一段落を告げ、みんなは招かれて桃源小学校で「播田飯」を食べた。後日収穫したときの味を試してもらうため、新故郷文教基金会は社区のお母さん達に益全香米の大鍋御飯の準備をお願いした。「わー、ほんとお芋の味がして、美味しい！」簡単な食事しかなかったが、労働した後みんなはパクパクと食べ、まるでこの世の美食だ。「収穫の時また参加するぞ！」「卒業までに植えたお米が食べられるかなあ」収穫の期待はもう子供達の心に植えつけられた。

桃米溪をはさんで桃源小と相對している生態田、点々と水中に芽生える浅緑、あれはみんなが植えた希望である。蔡鳳琴校長が言うように、「これは子供達がお年寄りのお百姓さんの苦勞を体験できる本当に有意義な行事だ。これらの子供達が今後耕地に対する感情をさらに深め、食物を提供する農民に対して、感謝と尊重の念を深めるでしょう。」

最後の野良仕事が新故郷の仲間達によって終わりを告げると、賑やかだった水田も次第に静まって、やがて月が出てきた。街灯に暖かな光がともり、新春の田植えは幕を下ろした、さあみんな片付けをし、帰宅して休息だ、そして、稲は自然の成長に委せましょう……。



水田には多くの泥人形が出現、泥んこだけど満足気



陳紹欽爺さんは以前苗を扱うために使った「鉄指」(「蒔田管」とも言う)を披露



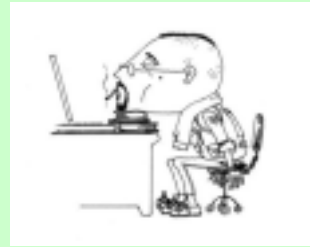
浅緑の苗、みんなが力をあわせて植えた希望でもある

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第2号 2007/3/17 発行

完成目前！「新たかとり教会」

「ひろっちゃん日記」に見る工事始末記



着工までに1年、さすが世界的建築

ペーパードームが解体され台湾に向け旅だったのは2005年6月のことだった。すぐにも新教会の工事が始まるはずだったが、さすが世界的建築家坂茂氏の力作、まず施工業者が決まるまでに紆余曲折があり、そして起工式を終え、建築確認があり、やっと杭打ちが始まったのはおよそ1年後であった。

2006年5月24日(水)

第1回建築総合定例会議

どれほどこの時を待っていたことか。もちろんこれからも色々大変だろうけど、それでもこれで、「動き出した」ことが実感できる！しかし長かったなあ。1年だよ1年！その気になって引越して1年も待ってたんだよ。

施主と設計者、施工業者の打合せ会議はこれから本格的に始まる。



やっと動き出した

2006年5月25日(木)

杭打ちが始まった

本格的に杭打ちが始まった。

しかし、大きな機械やなあ。倒れへんねやろか？

隣の家がちっちゃく見えるよ。

本杭は70本打ち込まれる。それが終われば山留親杭を113本打ち込む。

作業を見てたら、ここにどんな高層ビルが建つんやろかと思ってしまう。

打たれた杭たちは、これから何十年いやもしかして百年以上もの間地中に眠るんやね。今度掘り出される時はもう会えないけど、それまでしっかり教会を支えとってや。



杭打ち始まる

トイレにはこだわりたい

その後、掘削、基礎工事と順調に進んでいく。工事が進みだしても細かいところの調整がいろいろとある。トイレもその一つ。トイレは特に障害を持っている人たちにも気持ちよく使ってもらえるように考えたいと、ひろっちん(神田神父)はこだわる。

2006年7月20日(木)

そうや、明日から夏休みや

昼ごはん食べ終わったらみんなで現場事務所に直行。建築総合定例会議。会議の後はそのまま建築打合せ。全体のトイレの細かいところが決められた。たかとりトイレはこだわりを持ちたい。障害を持っていても使いやすいトイレ(当たり前だけど)、地域の夏祭りでもみんなに使ってもらえるトイレ。どんなお店に行ってもトイレを見るとそのお店の思いが伝わる。そんなことを考えながらブログを書いている今、ひょっとテレビを見るとトイレ特集をやっている。なんとトイレの扉を開けると、三方の壁が大きな水槽になっていて魚たちが泳いでいる。つまり中に入ると海の中でトイレをしているみたいなのだ。これはすごい！考えたこともなかった。ここまでこだわると見事だ、が、まっ、たかとりはそこまではできないなあ。

もうすぐ地域の夏祭りがある。いつも教会のトイレを使ってもらっていたが今回は工事中だからダメ、と思っていたら、工事現場のトイレを使ってもいいということになった。工事現場を通らなくてすむように外から直接トイレに入れるように別の入り口を作ってくれて、また工事現場には入れないようにわざわざ柵をしてくれる。業者さん、どうもありがとう。

夜は地域の会議。夏祭りでトイレが使えると報告したらみんなが喜んでくれた。



野田北夏祭り

聖堂が姿を現し、七変化

夏休みが終わるころから、聖堂が姿を現し始める。その屋上の円形の構造物を見たひろっちん(神田神父)はブログで「星雲からの宇宙船」になぞらえる。その後、聖堂はパピリオンへ、火の見櫓へ、そしてジャングルジムへと七変化する。そして年の終わりには、屋上はスカイラウンジとなって、夕日に映える新長田の再開発ビルを望むことができた。

そして、年が明け外壁が仕上げられると聖堂は光輝き始めたのだ。

2006年9月2日(土)

M78星雲から宇宙船

銀河系から300万光年離れたM78星雲の中の「光の国(ウルトラの星)」からたかとり教会に宇宙船が到着した。この惑星は地球の約60倍の大きさがあると言われていたが、今から約26万年前に太陽が爆発して死の星となっていた。しかしこの星に住む住人らは人工太陽を開発しそれを代用してきた。するとその中心から出る放射能によって大きな力を得るようになった。それ以来彼らは「ウルトラ族」として生まれ変わった。今から40年前にその一族のひとりがこの地球にやってきて地球の平和のために働いてくれた。

そしてこの度、そのウルトラの国とたかとり教会が友好関係を結ぶこととなった。この宇宙船で特使が来られ、この地球との友好大使としてこれからずっとこの地球に住むこととなった。乗ってきた宇宙船は友好のしるしとして今後たかとり教会聖堂の屋根として設置されることとなった。地域のまちづくりのためにこれからも活動を続けるたかとり教会の心強いパートナーができたわけだ。



宇宙船舞い降りる(9月2日)



火の見櫓(9月22日)



屋上スカイラウンジから新長田再開発を望む(12月28日)



パピリオン(9月16日)



ジャングルジム(10月26日)

2007年2月1日(木)

光輝く聖堂

聖堂の外壁が完成して足場が取り去られた。光り輝く聖堂のお目見えだ。ところが困ったことが。

意味として輝くのは結構なことなのだが、実際に輝きすぎているのだ。

太陽の光を反射して近所の家を明るく照らしすぎているようだ。

写真の手前が北側なので朝から晩までどこかが光ってしまうのだ。

「まちを明るく」はいいことだが、実際に眩しすぎるのは迷惑なこと。

さあ、どうする、坂(ばん)さん。

外壁やガラスがくすんでくるまでブルーシートでも被せておきますか？



聖堂はまちを照らす？

プロジェクト (アルファ) (オメガ) 聖堂内部のテント貼り

聖堂の内部には不燃性のグラスファイバー製の白い幕(太陽工業)が天井、壁一面に張り巡らされる。縦の長さ12mほどものが24ピースもあり、それを継ぎ足してゆく。問題はそれを現場にどうして運びこむかだ。そうになると、いよいよたかとりボランティアチームの出番、名づけてプロジェクトX!

当日は、地域、NGO、教会のメンバーたち30人近くが担ぎ手として集まってテントを搬入した。そして、プロの手によって聖堂内に見事に張り巡らされた。このプロジェクトに関わった太陽工業のスタッフたちをして、「会社の長い歴史の中でも初めての体験」と言わしめた代物だ。彼らが以前手がけた「東京ドーム」がプロジェクトXなら、「たかとりドーム」はプロジェクト(最初)(最後)だとひろっちゃん(神田神父)は名付けた。

2007年1月27日(土)

思い出に残る日

大国公園にみんなが集まった。

実は今日は建築中のたかとり教会聖堂内に張るテントの搬入日だ。地域、NGO、教会のメンバーたち30人近くが担ぎ手として集まってくれているのだ。作業員のお兄さんたちを含めると数十人になる。

そういえば、思い出すなあ。震災の最初の夏。



震災を思い出すな—

そんなときにも関わらずこの地域は夏祭りをしたのだ。救援基地でみんなで手作りのダンジリを作ったんだ。そして太鼓を叩きながらみんなで焼け跡をこうやって歩いたんだ。懐かしいなあ。

いよいよミコシは教会の中に入ってきた。

そして、終点の聖堂内へ。

今日テントを運んでくれたみんなは、きっと将来この聖堂に入ってくるたびに言うんだろうなあ。「このテントは僕たちが運んだんだぜ！」ってね。一生語り継がれるんだろうなあ。

集まってくれたみんなどうもありがとう！！

その後、テントはとりあえず聖堂内に吊り上げられた



みんなで記念撮影

2007年2月12日(月)

プロジェクト

聖堂の中に入り天井を見上げると思わず「おー」と言いたくなる。テントがスーッとせり上がって行くようだ。また、天井を見ていると、そこから滝が流れ出てくるようだ。テントには外壁の隙間からの光が淡く映し出されている。何だか不思議な空間だ。

それにしても見事に張り上げたものだ。しわも緩みもなくピシッと張り上げられている。みんなで運んだ甲斐もあったね。



張り上げられたテント

台湾の皆さん、新たかとり教会は4月には完成します。是非見に来て下さいね。

ひろっちゃん(神田神父)より

構成：垂水英司

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第2号 2007/3/17 発行

故郷・夢・飛翔

台湾桃米生態村 921 震災復興の考え方と実践

新故郷文教基金会

1. 総論：持続的ふるさとづくり

「地震は危機であり、転機でもある」

1999年9月21日、台湾中部にある震央間近の南投県埔里鎮桃米村に、マグニチュード7.3の「921大地震」が襲った。369戸の住宅のうち168戸が全壊、60戸が半壊するなど、被災率は62%に達し、住民の生命、生活、自然生態に前代未聞の損害をもたらした。

1999年10月、当時の桃米村村長であった黄金俊氏の要請で新故郷文教基金会（以下新故郷）は桃米村の震災復興活動に参加することになった。復興過程を通し、私たちは絶え間なく住民と討論を重ね、知恵を集める中で、生態村という復興ビジョンを掲げて努力することとした。

4年あまりが過ぎ、桃米社区は、混乱狼狽の中から、次第に合意形成が進み、故里の山や水を新たに見直しながら、自分たちの社区の特色を創り出しつつある。



桃米社区総体营造は海拔400～800メートルに位置し、開発の遅れた伝統的な小山村だが、豊富に宿す生態資源が社区転換の契機となった

社区は常に学習・成長しながら、社区資源の調査、生態倫理や方法の導入、原生植物の育成・推進、河川・湿地の保護などを通じて、種を生育・繁殖させ、生物の多様性を保持しようと努めている。同時に、生態教育を進めることで、生物多様性に対する人たちの意識や知識を高め、地球村の公民としての責任を果たすことで、生態系の恩恵を永続的に享受したいと考えている。

こうした過程で、政府、企業、社会、社区や非営利組織の垣根を越えた協力も得られ、桃米社区は伝統的農村から、生態保育と休暇体験教育基地が結びつき、生態、生産、生活、生命の四生が合体した生態村を目指して努力を続けている。

4年来、本会は社区の相談役として、再建の計画づくりや資金の導入を助け、社区の自主的能力の育成を系統的に図ってきた。深く根を張った教育学習は社区産業転換の基礎となり、社区には民宿、案内ガイド、社区美食班、産業組、生態工法建設サークルなどの人材資源が誕生した。それらは住民の仕事、収入そして福祉を促進しつつ、生態の産業化と産業の生態化を結合させようとしている。

私たちが物事を決める際、自然や文化環境の価値全体を見極め、環境に対する衝撃を最小にする必要があることから、エコツーリズムを始めるに当たって、環境負荷の管理抑制を打ち立てた。営業収入のなかから「社区公積金」と「社区産業」という制度を作り、社区運営の事務経費や社区のための経費に充当し、まちづくりにとって大切な利益を分かち合う精神を実現しようとしている。

桃米という旧来の伝統的農村は、生態保育、社区産業、教育学習とふるさと意識を兼ね備えた、持続的な郷土づくりを目指している。

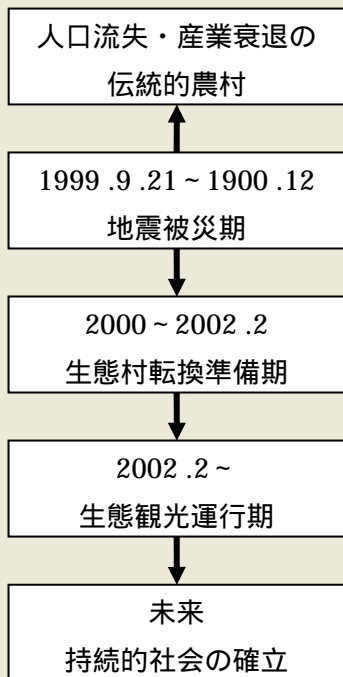
桃米社区は危機を転機とし、新故郷文教基金会の協力の下、住民は知恵を集め、再建ビジョンを作り、持続的故里作りのため行動する



教育学習は桃米が転換するための重要な鍵、資源調査、野外学習、生態観測・・・などの訓練課程を通して住民は故里に対する認識を改め、教育の力が根を張って、社区改造の基盤は日々固まる。

たゆまざる教育学習と幅広い協働で、桃米社区は自らの特色を見出し、次第に生態、生産、生活を兼ね備えた故里へと変わりつつある。

2. 重点時期と目標づくり



湿地の復元や改造、これは桃米生態村の重要活動の一つであり、住民は育成制度をつくり、定期的に観測や環境維持を進め、各湿地を景観と教育の解説スポットとしている。



社区資源調査によって、桃米には多くの生態資源が秘められており、特に蛙、トンボの種類は台湾でも一二を争うぐらいで、生態村を目指すうえで有利な状況だ。



川の清掃活動に参加することで、住民は土地に親しみを持ち、自然と人との関係を見直し、「故里の山と水から出発する」という考え方を育む



面積 18 平方キロの桃米社区は、人口 1200 余人で、もともと人口は高齢化、産業は衰退傾向にあり、社会関係も疎遠で、公共施設も粗末といった、活力や希望の乏しい旧来の社区であった。

「何を再建するのか」「どうして再建するのか」が大きな問題だった。私たちは住民と絶えず会合し、話し、知恵を集める一方、社区資源の調査を行った。その結果桃米村は、経済が衰退し開発が遅れたゆえにかえって豊かな生態資源を埋蔵しており、台湾 29 種の蛙のうち、22 種が生息していることなどが明らかとなった。

社区自ら策定した「桃米生態村」再建ビジョンは、教育学習 観念の変化 行動実践の過程を循環しながら、次第に発酵し、加熱していく。

そして、内部的に人材や組織を育て、外部に多様な協力関係を築き、資金を導入しながら、桃米生態村の目標に向かって一步一步前進する。